西田君の憶ひ出

狩野直喜

はつきりしたことは言へないが、私は明治廿五年に大學に入學し、漢學科といふものに這入つた。その第二回生であると思ふ。その時分は今の制度とは全く違ひ、漢學科と言つても科目は漢學だけではなく、文科大學の學課は皆同じで、たゞ漢學科は漢學に關する時間が多いと、いふだけであつた。卒業證書には夫々の教授がサインをし、それを大學長が認め、更に總長がそれに印を押して課程の修業を證したのである。教師としてはブッセが居り、哲學概論や哲學史を習ひ、後にケーベル先生からも聽いた。語學は英、佛、獨の中必ず其一を選ばねばならず漢學、文學、社會學などは三年を通して聽講した。こんな具合であつたから、科が違つてをつても懇意な人は懇意になつた。西田君は一年先輩だつた。選科は何時卒業といふこともなく、誰の講義でも聽かれたのであるが、同じ教室で西田君の顔を見たことはない。どうして知つたかと言ふと圖書館に於てである。私もよく圖書館へ行つたが、西田君も始終來てをられ、同じ机で向ひ合つて坐ることなどもあり、話をするやうになつたのである。其程度で君の下宿を訪問したり、互に往來するほど親しくはなかつたが。普通の人ではないと思つて居た。その内に君は見えなくなり、私も卒業して大學院に入り、五年ほど東京に居たが其間に君は山口の高等學校から金澤の四高に移られたやうである。山口や四高で何を教へて居られたか詳しいことは知らないが、何時かの話に、「僕は金澤で獨逸語の先生をやつたが、それは大そう良かつた。自分で專門の書を讀むのに非常に役に立つた」と言はれたことがある。その獨逸語は何處で學ばれたのか、自分でやられたのではなかつたらうかと思ふ。選科生だから勝手なことが出來たのである。それから京都へ來られたが、淺深の差はありても皆君を知つて居たものが多く教授會でも皆が贊成して之を迎へ、私も君と舊友を溫めた。君は又藤井乙男君とも極く懇意であつた。藤井君

は私よりも一年か二年ほど先輩だが、君と西田君は特別に懇意であつた、これは兩君とも四高で同僚であつたからと思ふ。少し餘談になるが藤井君は亡くなる前に、西田君と私に會ひたいといつて居られた樣であるが西田君から其死を悲しんだ手紙をもらつた。私は早速返事を出したが、それを見られたか、どうか。同僚、先輩が亡くなつてゆくことは實に淋しい。

私は哲學のことは何もわからないが、西田君が我國普通の哲學者と違つてゐたところは漢籍の力が非常にあつたことかと思ふ。金澤は大藩で明治初年からフランス語の先生がゐたりした樣子だが、封建時代に於ける藩學の影響が明治以後まで續て居た事が君のみでなく僕と同年輩の人で漢學の專門家でなくして其造詣あるもの少からざるを見て能く分る。君の話では金澤藩の儒者某（今姓名を忘れた）江戸へ出て、安井息軒に學び歸つて塾を開き教授して居たが其人について學んだと言つてをられた。

西田哲學といふものは難しいものださうだが、西洋のものを理解する丈でなく、自分で哲學を編み出したのは、西洋哲學を基礎としこれに儒學や諸子學の知識を加へた事が西田哲學を編むに大いに役立つたのではあるまいかと私は思ふ。ある私の友人が君の「善の研究」を讀み「あれは陽明學だ」と言つたことがある、さう簡單には片づけられぬと思ふが。君は又禪もやつた人である。金澤でやり妙心寺でも何とかいふえらい老師について參じて居られたと聞た。要するに西洋のものを土臺にして、東洋の思想を攝取するところがあつて、獨得の哲學が出來たのではないであらうか。僕はかつて易のことを話したことがあるが「それは面白い」と言つてゐられた。詩も作つた。中にはよい出來のものがあつた。西洋の文學も好きであつた。私とはまるで專門は違ふが話の材料はいくらでもあり、話が面白かつた。

世間では哲學者といふと常識のないものと思つてゐるが、西田君はさうでない。西田君は非常に常識のあつた人で、しかもそれを外へは現はさなかつた。世態、人情についても深く解つてゐた人である。奇人と評するのは西田君を知らない人の言である。常識に富み、細密な人であつた。それから意志の非常に强い人であつた。教授會などでも堂々と意見を述べ、決して容易にこれをまげなかつた。戰爭が始まりて、今に至るまで學者でも時の變遷につれて浮沈したが西田君は決してさうではなかつた。あの勇氣は實に貴ぶべきものであつた。

最後に申したきは君から「僕は日課として午前には思

索をする故に午前にはなるべく人に面會を避くるが思索の時は一身に汗流るゝ事がある。午後に至りて初めて讀書する」と聞かされ思索と讀書を二に分ち讀書を第二義に置くやうに思つた。余等の如く讀書を第一とするものとは趣を異にする感を起した。これは君の流義か否かは知らぬが憶ひ出の最後に錄す。